

No.3017

「中国仏教石窟寺院のデザインの展開と変遷に関する研究  
—雲岡石窟における“皇帝のためのデザイン”からの転換期に着目して—」

筑波大学大学院 人間総合科学研究科  
世界文化遺産学専攻博士後期課程  
因幡 聡美

本研究では、5世紀に中国北魏の都・平城（山西省大同市）に造営された雲岡石窟について、その造営が「皇帝・皇室のため」という名目からの転換期を迎えた、洛陽遷都前後（494年頃）の造営活動に着目し、窟室や仏龕のデザインにいかなる変容が生じたかを調査することによって、該当時期の造像活動の模索の様子を明らかにすることを目的とした。

主な考察対象として設定したのは、494年前後の開鑿とされる窟室で、その中でも特に①当初の設計に基づく箇所と、②それに近い時期ではあるが当初計画とは異なる別計画の造像活動の侵入が見られる、三つの窟（第14窟、第15窟、第16-1窟）を対象とし、実地調査や博物館資料の調査と文献・写真資料調査等を行った。手順として、対象三窟の①と②の箇所を明確に分けるために、造像・仏龕形式と全体的なデザインから両箇所の区分を行った。

考察の結果、第15窟と第16-1窟は初期の計画がある程度完成し、その後に別計画が侵入したが、第14窟は初期の計画は第15窟や第16-1窟よりも早くに中断され、別計画が侵入するようになったと考えられる。三窟の当初の設計は、おおむね第二期諸窟の伝統に倣い、左右相称で対面壁での対応性が考慮された統一感のあるデザインとなっている。そのため洛陽遷都後も雲岡石窟の基本的なデザインの方法は継承されていたことが理解される。しかし、別計画の侵入箇所は、前時期のデザインの中に侵入する際に、仏龕（特にそれひとつでシンボリズムが完結するもの）が好んで制作され、それらは窟内のデザインとの繋がりが考えられたものでは無かった。

以上の窟の分析から、この時期の特徴として導き出されることは、第二期諸窟から続く窟の中を統一するというデザイン性と、また、壁面間の統一性をデザインの基礎としないデザイン性、という2種類が混在していたことが理解された。

本研究で実施した、当初の計画への別計画の侵入が見られる窟の特徴の考察を通して、雲岡石窟の大きな分期論では掬いきれなかった、造像活動のより細かな動きを見出すための手がかりを提示することができたと考えられる。